法陀利華

第390号（令和３年10月11日(月)発行）

発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

救世観音大菩薩
聖徳皇と示現して
多々のごとくすてずして
阿摩のごとくにそひたまふ
（『正像末和讃』聖徳奉讃）

無常に向きあう

現代社会学部教授　藤井隆道

さる令和三年三月十五日、本学の卒業式が執り行われた。毎年恒例の行事が、今回ひときわ感慨深く思われたのは、コロナ禍で先が見通せないなか、関係者の尽力により、卒業生に会ってお祝いの言葉を述べることが無事できたからであろう。一年前には卒業式が中止になり、卒業生たちに一目会うことすらかなわなかったのである。

別れといっても、卒業といった機会ならば、寂しさもあるがそれ以上の嬉しさもある。しかし別れは時として痛切な経験である。特に死による別離は、親しい人とのあいだに実際に起こったとき、あるいは自身にこれから起こる事柄として予期するとき、あまりに大きな悲嘆や苦悩、不安をもたらす。そしていまコロナ禍によって、私たちは以前にもまして、病や死、別離といった苦を日常のなかで意識し、「無常」に向きあうことになった。

＊　＊　＊

「無常」は仏教の根幹的な教えである。私たちをとりまくあらゆる事象は、自身のこの心身も含めて、一定不変ではなく、留まることなく変異してゆき、やがて滅する。他者とのあいだに形作られたつながりもそうである。出会いがあれば必ず別れがある。

この無常という現実にどのように向きあえばよいのだろうか。仏教の求める智慧とは、ありのままに物事をとらえることである。無常なものもまた、無常なものとして、ありのままに受け取る。これと逆に、無常なものを、ずっとそのままであると見て、またずっとあり続けてほしいと執着することから苦が生まれる。

ところで、この無常の教説について、学生から時折聞く感想がある。それは、あらゆるものが変化し、滅しゆくということは分かるが、たとえ真実であるとしても、それを心に留めて生きるのは、悲しみや不安に満ちた暗い生になるのではないか、後ろ向きな生き方につながるのではないか、といったものである。

このような感想は理解できる。見たくないものは見ないに越したことはない、という思いがベースにあるのかもしれない。しかし仏教は智慧の教えである。真実をありのままに見ることから、生が実り豊かなものとなることを教えている。

＊　＊　＊

現在、時価総額世界ランキング一位の企業であるアップルの共同創業者、スティーブ・ジョブズは、その死の六年前の二〇〇五年に、スタンフォード大学の卒業生に向けてスピーチを行った。そのときジョブズは、自らの体験をもとに三つの話をしている。巨大テック企業のCEOが、全米を代表する名門校の卒業生に向けて話すスピーチである。最先端のテクノロジーやイノベーションに関わる華々しい話がなされたのだろうと思うかもしれない。しかしジョブズが語ったのは、大学を辞めたことと、創業したアップル社を一度追放されたことという二つの苦い経験、そして「死」についてであった。なかでも学生たちを惹きつけたのは、最後の「死」の話だったという。少し長くなるが、その最初の部分を紹介したい。

「もしあなたが、一日一日を、自分の最後の日であるかのように生きることができたら、いつの日かきっとその通りになる」――十七歳の時、こんな感じの引用を読みました。感銘を受けた私は、それから三十三年のあいだずっと、毎朝鏡を見て、自分に尋ねてきたのです――「もし今日が人生最後の日であったら、今日しようとしていることをしたいと思うだろうか」と。そして、その答えが「ノー」である日があまりに長く続くたびに、何かを変えなければならないと分かるのです。

もうすぐ自分が死ぬと心に留めておくことは、人生の重大な決断のときに役立つ、私が今まで手にしたなかで最も大切なツールです。なぜなら、ほとんどすべてのこと――あらゆる外的な期待、プライド、混乱や失敗への恐れ――こういったものは、死に直面すれば消え去り、本当に大切なものだけが残されるからです。（スタンフォード大学HPより翻訳）

このスピーチの一年ほど前に、ジョブズは初めてがんの手術をうけている。「死」という重いテーマを選んだのは、そのこともあったのであろう。しかし彼はそのずっと前から、鏡のなかの自分と、そして死に向きあってきたのである。

ジョブズが若い頃より東洋思想、とりわけ仏教に深く心を寄せてきたことはよく知られている。iPhoneなど彼の手がけたプロダクトのデザインについて禅の思想の影響が指摘されることがあるが、彼のここでのスピーチには、仏教的な精神が確かに息づいているように感じられる。

＊　＊　＊

仏教は無常に向きあうことを説いてきた。古いパーリ経典に、次のような釈尊の言葉がある。

過去を追いゆくことなかれ／未来を願いゆくことなかれ／過去はすでに過ぎ去りしもの／未来は未だ来ぬものゆえに
現に存在している法を／その場その場で観察し／揺らぐことなく動じることなく／智者はそれを修するがよい

今日こそ努め励むべきなり／誰が明日の死を知ろう／かの死王の大群と／約束することなきゆえに

（『賢善一喜経』、片山一良訳『中部　後分五十経篇Ⅱ』一三七頁）

私たちはいつ死ぬか分からない。それは明日のことかもしれない。だからこそ過去や未来にとらわれるのではなく、目的に向かっていま勤め励むことが大切である。ここで釈尊は、修行において、いまここにある現象や自分の心に思いを集中させることを説くが、これを仏教的な生き方の指針と受けとめることもできる。

未来を展望し、また過去を振り返るということは、動物のうちヒトだけが持つ特異な能力である。それが基盤となって、人間の社会・文化が成り立っているのだともいえる。しかしこの能力は重荷ともなる。私たちは往々にして過去や未来に過度にとらわれて自由を手放し、大切なことを見失ってしまう。

あらゆる事象は、ひとときも留まることなく変異し過ぎ去っていく。この現実に向きあうことを通じて、私たちはまた自分自身に向きあい、いま自分にとって本当に大切なこと、なすべきことに心を向けるのである。

＊　＊　＊

煩悩を持って生きる私たちにとって、無常はときに、あまりに痛ましい体験となる。しかし仏教は、その無常の真実が、いまここに私が生きることの意義に結び付くのだと教えている。無常であるからこそ、いまここに生きるひと時が、そしていまある人とのつながりが、かけがえなく尊い。このように受けとめて生きることが、はたして後ろ向きな生き方であろうか。

ことばの窓

⑤「正しい」語義？

「情けは人のためならず」の俗用「相手のためを思うなら情けをかけるな」を、「現代の誤った用法」と断った上で辞書に掲載したところ、何本も抗議の電話を受けた――よく知られた中型辞書の編纂者の講演で聞いた話である。なぜ、と私は首をひねり、続けてほとんどの抗議の中身が「たとえ誤用と書いてあろうと、辞書に掲載してしまったら、その語義を認めたことになるではないか」という趣旨であったと聞いて、そういう考えもあるのかと、変に感心してしまった。

この「抗議」の背景には、「正しい語義を守っていくべきだ」という意識があるとおぼしい。これが「従来の語義がたとえ忘却されてしまったとしても、辞書から捨てるべきではない」という主張であれば、私は「そのとおり」と即答するであろうが、「俗用を載せるな」となると、辞書への、少なくとも語義の史的変化も明示することを本分とする（はずの）中型辞書への要望としてはいかがなものかと思ってしまう。

たとえば、「片腹痛い」という慣用句がある。相手の言動を取るに足りないものと嘲笑する意であるが、辞書を紐解けば、本来は「傍ら痛し」であり、かな遣いの誤認から「片腹」と理解されるようになったと知れる。人の言動に対して気を揉んだり、ハラハラしたりする意である。『日本国語大辞典』（第二版）によれば「片腹」の表記は早くも藤原実資の漢文日記『小右記』長和三年（一〇一四）の記事に見える。意味の誤認については、『日国』では『枕草子』など平安時代中期の作品を引くが、これらの例は本義で理解してもよさそうで、確実な例は、十七世紀初頭成立の「おかしくて片方の横腹が痛い……笑うべきこと、嘲るべきこと」という『日葡辞書』の語釈あたりではないかと思う。

以降、近松やら露伴やら鏡花やら、名だたる作家たちが「誤用」しているわけだが、彼らを「誤用を氾濫させたとんでもない連中だ」と批判する人はまずあるまい。「正しい語義」を「本来の語義」と考えるなら、我々は現存最古の記紀萬葉に帰る必要があるが、とうてい無理である。「ことばは移り変わるもの」というとあまりにも月並み（この使い方も「誤用」かもしれない）だが、ある程度の規模の辞書は「誤用」も載せてこそ役割を果たせる、そう思う私は、くだんの編纂者の判断に敬意を表している。

（国文学科・池原　陽斉）

澪標

釈尊はラージャガハから故郷に向かう旅の途中で入滅している。その旅に出る直前、ヴァッジ族征服を計画したマガダ国王アジャータサットゥから、その政策について諮問を受けている。釈尊は七つの項目を挙げ、ヴァッジ族がそれらを守っているうちは、繁栄し続けるであろうと説いた。

その内容には大きく三つの特徴があるといわれる。すなわち、協和の精神、経験の尊重、宗教的寛容である。これらは、直接は王に対する助言であり、血気に逸る王に冷静に考えさせ、征服を思い留まらせる内容である。

しかし、その内容はいずれも現代的意義がある。このうち、協和の精神とまとめることができる内容は、会議に多くの人々が参加し、互いに協力し合っていることである。一種の民主的社会である。これらは仏教教団でも、その繁栄に必要な事柄として大切にされた。

ところで、本紙発行の頃に衆議院議員の総選挙が見込まれる。学生の皆さんには、協和の精神で、ぜひ投票を行っていただきたい。日本や世界が繁栄できるように、ぜひ必要なことである。

近年の大きな選挙では、自分と各政党・候補との考え方の異同を示す、ボート・マッチ・システムが提供され、投票先の選択に大いに参考になる。

大学人にとって、選挙は自らの学びが社会の中でどんな意義があることなのか、考える機会でもある。研究・学びの成果を投票の形で社会に還元したいと思う。（義）

構造的に考える、好きなことをする

家政学部教授　山岡　俊樹

私は社会人の前半を企業でデザインと人間工学を実践し、後半を教員として研究と教育に従事し、ささやかな人生を送ってきました。この経験を通して得た考えを２つ述べたいと思います。構造的に考えることと、好きなことをすることです。

1．構造的に考える

構造的に考えるとは、モノ・コト、システムの本質を把握することです。構造は、概念・情報に係わる様々な要素をグループにまとめ、目的・手段で階層化した状態をいいます。従って、構造を認識できると、追加すべき要素、不要な要素が分かり、最適な判断を下すことができるのです。

この構造は制約によって定まります。例えば、京都の町家の例です。京都の町家が細長い長方形なのは、江戸時代にあった「間口税」のためで、家の間口３間（約５・４ｍ）ごとに税金をかけることにしたためです。この制約のため、建物の構造（細長く中庭のある建物）が定まりました。このように制約により構造が定まってきます。

我々は制約の中で生活しています。我々の身体は自然環境（空気、重力など）という制約により、その機能、構造が定まっています。この自然環境だけでなく、我々が行動するには様々な社会的制約に適合しなくてはなりません。社会的制約は法律、社会慣習や道徳律などです。我々の行動や思考は、その社会の見えない制約によっても影響を受けています。

私の20代、東芝本社デザインセンターでデザインをしていた時、後輩と一緒に発注したデザインモデル（試作品）のチェックのため、モデル屋さんに行くことになりました。訪問する途中、彼が煎餅のお土産を持っていたので、不思議に思って聞いてみました。すると、彼はモデルを作る職人さんに、気持ちよく仕事をしてもらうため持参したというではありませんか。一本取られたと反省しました。その当時、私は近代主義の考え方の影響を受け、効率・合理性が一番大事だと無意識に考えていたのです。このように人々の行動に影響を与えている社会的制約を把握することにより、すべき最適な行動を考えることができます。

製品、操作画面やサービスのデザインをする際、それらに影響を与えているのは何か、我々の行動に影響を与えているのは何かを構造的に考えるのが非常に重要です。それには行動観察を行い、ユーザの価値観を把握し、それをデザインに反映させる必要があります。一例として、私が業界初の操作部が傾斜した鉄道用券売機のデザインを東芝から発売できたのも、三日間、阪急梅田駅で行動観察した成果です。

ＵＸ（ユーザ体験）デザインが２００５年ごろから活発になり、デザインする場合、体験に基づいてデザインするのは当たり前でしたが、なぜかその必要性の説明ができませんでした。その構造を特定できないと理解することにはなりません。海外の文献を見ても、ＵＸが必要であるという前提で書かれたものばかりでした。アリストテレスの幸福論や特に早大名誉教授の加藤諦三氏の「人生は祭りだ」の言説に触れて、祭りだからこそ楽しくなるＵＸが必要になるのだなと構造的に納得したという経緯があります。

構造的に思考すると、見えなかった世界が見えるようになります。従って、何をすべきか分かり、計画的に行動できるようになります。

人間工学で博士号を取り自分の専門領域にしたのも、デザインだけでは理解困難な複雑なシステムでも構造的に把握できるようにするためでした。

2．好きなことをする

小学生のころから現在まで私に寄り添ったのはモノ作りと音楽でした。母親の実家が横須賀で小さい造船所を経営しており、小さいころよく遊びにつれて行ってもらい、木の香りや鉋で木を削る音などを聞いて育ちました。小学生時代は勉強もせず、自動車のハンドルの構造を知りたくて、自動車雑誌を読んだり、自分でデザインした模型を作ったりしていました。特に、オリジナルデザインのホバークラフトが３ｍｍ浮き上がったときの感動は今でもよく覚えています。大学に進学するときは、機械、建築かデザインか、迷いましたが、身近なモノづくりがしたく、最終的にデザインにしました。やはり好きなことをするのが一番いいのではと思います。

音楽はもっぱらクラシック音楽で中学生あたりから本格的に聞き始めました。クラシック音楽は最初に聞くには壁が高く、分かりにくいのですが、何回も聞いていると理解できるようになります。モーツアルト、ベートーベンから始まり、ストラビンスキー、ウエーバー、ブルックナー、シベリウス、Ｒ・シュトラウス他をへて、最近は先祖返りでチャイコフスキーのバレエ曲をバックグランドミュージックとしてよく聞いています。

社会人になってから米国のブルーグラスを聴き始めました。このブルーグラスは米国の中西部で発達し、キリスト教文化を背景にした、リズミックな音楽です。人生を語る内容の曲がおおく、落ち込んだ時、この音楽を聴くと不思議に元気になれるのです。

イタリアの大オペラ作曲者であるベエルディが１８９３年、79歳の時、ファルスタッフというオペラを作曲しました。高齢でなぜ作曲したのかとマスコミから問われ、今までのオペラは未完成であるので、常に完成を求めているというコメントをしました。ドラッカーはこの言葉を聞いて感動し、生涯仕事をすると決めたそうです。私も微力ながら、それにあやかりたいと思っています。

ある本に、好きだから行うのではなく、行うから好きになると書かれてありました。何事もそうで、自分の努力で夢中になるようにするのが大事ではないでしょうか。

法のことば

救世観音大菩薩
聖徳皇と示現して
多々のごとくすてずして
阿摩のごとくにそひたまふ

（『正像末和讃』聖徳奉讃）

救世観音は、聖徳太子としてこの世にそのお姿を現され、まるで父や母がわが子を思うように、見捨てることなくいつも付き添っていてくださる。（『浄土真宗聖典 現代語版　三帖和讃』一七七頁）

親鸞聖人は太子を「和国の教主」とも表現されます。それこそ、日本の釈尊のような存在であり、仏教の新しい動きが登場するたび、太子はその先駆とされました。平安時代に浄土信仰が盛んになると、太子は人びとを極楽へ導く観音菩薩の化身ともされたのです。

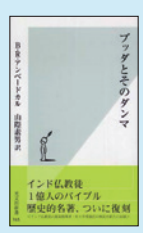
この和讃では、阿弥陀仏の救いを助ける存在（観音菩薩）として、父母のように私たちに寄り添ってくださる、と説かれます。時代や空間を超えたイメージの重なり合いを見て取ることができるとともに、自分を支えてくれる方々へ、思いをはせてみましょう。

（中西　俊英）

シリーズ　智慧の蔵㊵

『ブッダとそのダンマ』

B・R・アンベードカル 著　山際素男 訳
光文社　二〇〇四年



著者のビーム・ラーオ・アンベードカル（一八九一～一九五六年）は、インド独立後、最初の法務大臣としてインド憲法の制定に尽力した人物である。不可触民である彼は、カースト制度の廃絶にその生涯を捧げた活動家としても有名である。ヒンドゥー文化の枠内でいくら活動していてもカースト制度の廃絶は見込めないと考えたアンベードカルは、ヒンドゥー教と決別し、一九五六年十月、マハーラーシュトラ州のナーグプルで約五十万もの人々とともに仏教に改宗する。この頃に執筆されたのが『ブッダとそのダンマ（原題*The Buddha and His Dhamma*）』である。アンベードカルは、本書の刊行を見ることなく、改宗の二ヶ月後にこの世を去る。

刊行後、各国の仏教者や研究者から、アンベードカルの仏教理解に対する批判が相次いだ。たとえば、ブッダの出家の理由をシャカ族とコーリヤ族との水利権の争いへの反発によるものとし、仏教の「苦」を「惨めさ（misery）」「貧窮（poverty）」とした点などが問題となった。事実、これらは近現代の仏教研究に基づけば是認しがたい。しかし、その背景には、当時の不可触民が直面していた井戸水の使用禁止や貧困の問題があった。アンベードカルはこうした不可触民を取り巻く諸問題を解決する道を仏教に見出し、本書を著したのである。様々な時代や地域に生きる人々の要請に応じて展開した仏教の歴史に鑑みれば、社会的に虐げられていた不可触民を差別から解放することを目指した、アンベードカルの仏教を頭ごなしに批判することは不当のように思う。今もインドでは彼に端を発する仏教運動は続いている。本書はアンベードカルの遺志を受け継ぐ人々にとっての道標であり、まがいもない仏教聖典なのである。

ところで、本書の最後に「浄土祈願」という見出しがある。そこに「光を照らすタターガタ（＝如来）に心より帰依する」とある。これは、親鸞が高僧の一人に選んだ天親の『浄土論』に説かれる、阿弥陀仏への帰依を宣べた詩句を間接的に引用したものであることが近年あきらかになった。おそらくアンベードカルはこの如来が阿弥陀仏とは認識していなかったであろう。それでも彼が光を照らす阿弥陀仏に心惹かれ、むすびに引用したことに、浄土真宗との不思議な縁を感じる。

（王生　泰紀）

お知らせ

✻ 卒業回生の合同礼拝 ✻

卒業回生のみなさんは本学での最後の礼拝として「合同礼拝」を行います。

日　　時　令和３年11月17日（水）
15：00～16：30
場　　所　Ｂ501教室
記念講演　「コロナ禍から学ぶ人生の解決とは」
宮崎　幸枝 氏（みやざきホスピタル副院長）

・必ずお念珠を持参してください。
・参加者には卒業後にもずっと使っていただけるオリジナルの記念品があります。

✻ 仏前成人式 ✻

成人のお祝いに本学礼拝堂で仏前成人式を行います。記念講演では、英月氏にお越しいただきます。

日　　時　令和３年12月11日（土）13：00～
※12：10から受付を開始します。
※12：30までに入場してください。
場　　所　礼拝堂（Ａ校舎５階）
記念講演　「あなたが、あなたのままで輝く～仏前成人式によせて～」
英月　氏（真宗佛光寺派長谷山北ノ院　大行寺　住職）

・礼拝堂での定員先着100名です。　・必ずお念珠を持参してください。

◆申込などの詳細は京女ポータルまたは宗教教育センター（L校舎３階）までご確認ください。
※なお、新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、大学ホームページまたは京女ポータルにてお知らせします。